

|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 蜜月の裏側ーウラジーミル・ナボコフと冷戦期アメリカ   |
| Author(s)    | 後藤, 篤   |
| Citation     | 大阪大学, 2024, 博士論文  |
| Version Type |   |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/96181">https://hdl.handle.net/11094/96181</a>   |
| rights       |   |
| Note         | やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。 |

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 論文内容の要旨

|  |                            |
|--|----------------------------|
| 氏名   | ( 後 藤 篤 )                  |
| 論文題名   | 蜜月の裏側——ウラジーミル・ナボコフと冷戦期アメリカ |
| 論文内容の要旨  |                            |
| <p>代表作『ロリータ』(Lolita, 1955)が全米ベストセラーリストの頂点を極めて以降、ロシア出身の亡命作家ウラジーミル・ナボコフ(Vladimir Nabokov, 1899-1977)は彼にとっての第二の故郷たるアメリカを賛美する発言を繰り返し、自作の政治性を頑なに否定するとともに、芸術のための芸術を志向する審美主義者のごときポーズを取った。1960年代以降の晩年をスイスで過ごしたナボコフは、一方でマスメディアへの露出の機会を増やししながら、他方であつたロシア語作品の英語翻訳版を矢継ぎ早に世に問うことで、本国に不在であるにもかかわらず同時代のアメリカ文学シーンに対して圧倒的な存在感を誇示するようになる。今や巨匠と呼ばれるに相応しい地位を獲得した作家は、それに飽き足らず己の筆を永続的な価値を持つ象徴資本に仕立て上げるべく、慎重に準備されたインタビューを通して浮世離れた言葉の魔術師としてのセルフイメージを巧みに演出することに余念がなかった。</p> <p>こうした作家の自己神話化のプロセスと並行して、英米の文学者たちは1960年代後半に専門的なナボコフ研究に取り組み始めた。ナボコフの小説美学を探究した1970年代と、その反動として作品の倫理的側面に注目が集まった1980年代を経たのち、1990年代においてはそれらを総合する概念としての来世の可能性をめぐる形而上学的主題が探究された。だが鱗翅類研究をはじめとする科学との関連性が取り沙汰された2000年代以降、とりわけ2010年代に入ってからというもの、英語圏の新世代の研究者のあいだでは作者自身が主張する非政治性を自明のものとしてきた従来の批評的視座の有効性が、新歴史主義以降の観点から見直され始めている。いまナボコフを読むことは、新批評的なテキストへの没入を絶えず読者に求めてやまない作者の亡霊に抗いつつ、その創作が裡に秘めた歴史認識や政治意識をめぐる問題を見つめなおすことでもあるだろう。</p> <p>そこで本論文では『ロリータ』を含めた小説5作と戯曲1作を主たる考察の対象に、1940年の渡米に始まる英語作家としてのナボコフの後半生を同時代のアメリカの現実に照らして歴史的・政治的に再文脈化することを試みる。</p> |                            |
| <p><b>はじめに 冷戦戦士の横顔</b></p> <p>目下の英語圏におけるナボコフ研究を牽引するウィル・ノーマン(Will Norman)が指摘するように、共産主義革命によって祖国を追われた亡命作家は、1919年に誕生した悪しき敵国との私的かつ詩的な「長い冷戦」を常に既に戦っていた。同時代の歴史的コンテクストに照らしてテキストの細部に目を凝らしてみれば、例えば『確証——回想録』(Conclusive Evidence: A Memoir, 1951)のうちにも冷戦戦士としてのナボコフの横顔が浮かび上がってくる。立憲民主党に所属する高名な政治家であった父からリベラル・デモクラシーの理念を着実に受け継いだ作家は、アメリカに迫りくる共産主義の脅威に対して無関心ではいられなかった。ましてや、『ニューヨーカー』に提案した記事の内容が変わり果てたロシアのメンタリティに鋭い光を当てるものと確信していたナボコフであれば、己の自伝物語がアメリカ人読者を文字どおり啓蒙することを——あるいは、自らの毒々しげな物言いによって、共産主義プロパガンダが同毒療法のごとく希釈されることを——大いに期待していたに違いない。この文脈においてナボコフが1950年11月、当時彼が常連寄稿者に名を連ねていた『ニューヨーカー』(The New Yorker)編集部に書き送ったソヴィエト批判を目論む時事評論の企画を書き送っていたという事実は重要な意味を持つ。このささやかな伝記的事実は、倦むことなくソヴィエトの動向に目を光らせていたナボコフの筆が冷戦に貢献していた可能性を雄弁に物語っているのだ。</p>   |                            |
| <p><b>序章 既知との遭遇——ナボコフの冷戦コンテクスト</b></p> <p>アメリカ時代のナボコフが『ニューヨーカー』の作家であったならば、スイス時代の彼はある意味では『エンカウンター』(Encounter)の作家だった。近年の冷戦研究においては、合衆国政府の命を受けた中央情報局(Central Intelligence Agency, CIA)のエージェントの指揮の下で文化自由会議(Congress for Cultural Freedom, CCF)が発足したこと、ひいてはCCFが各国に創刊した文化系批評誌の一つである『エンカウンター』が——自由の価値と知的独立</p>   |                            |

を朗々と謳うその裏で——CIAから密かに資金援助を受けていたことが問題視されている。グレッグ・バーンハイゼル (Greg Barnhisel) が『冷戦モダニスト——芸術、文学、アメリカの文化外交』(Cold War Modernists: Art, Literature, and American Cultural Diplomacy, 2015) で指摘するように、『エンカウンター』の誌面を飾ったモダニズム文学は「西側の優位」の証たる「活力と個人主義と自由」の表象たりえた。1957年にニューヨークのダブルデイ社が発行する季刊誌『アンカー・レビュー』(The Anchor Review) に掲載されたナボコフの「『ロリータ』と題する書物について」(“On a Book Entitled *Lolita*,” 1957) も例外ではない。今日においては作家の美的マニフェストとして有名なこのエッセイは1959年に『エンカウンター』に掲載され、初出時とは異なる文脈に置かれて反共リベラリズムのイデオロギーに包摂されることで、いわば押しも押されもせぬ冷戦戦士のマニフェストとしての意味を獲得したのである。『ニューヨーカー』に掲載を拒否された英語短篇小説「ヴェイン姉妹」(“The Vane Sisters”) にしても、「『ロリータ』と題する書物について」と同じく1959年に『エンカウンター』に掲載されている。最終段落にアクロスティックが仕掛けられた同作は、ナボコフ研究者のあいだでは作者の形而上学的な関心をメタフィクションとして提示した幽霊小説として定評を持つ。だが物語の細部に語り手が抱く核の不安を垣間見せていることからして、この作品のうちにもまた、以下の各章で取り上げるナボコフの代表的な英語作品と同様に、作家の創作活動と同時代の冷戦期アメリカの現実との接続の可能性を見出すことができるだろう。

## 第一章 読むことのデモクラシー——『ロリータ』のリベラルな想像力

第一章では『リベラルな想像力』(The Liberal Imagination, 1950) で知られる批評家ライオネル・トリリング (Lionel Trilling) とナボコフの交流をめぐる伝記的事実を足掛かりに、ロシア語時代のナボコフの作品に通底する少女愛のモチーフが集約された中篇小説『魅惑者』(Volshebnik [The Enchanter], 1939) と、ナボコフにしては珍しく時事的な政治性であるものの、エドガー・アラン・ポー (Edgar Allan Poe) の「ウィリアム・ウィルソン」(“William Wilson,” 1839) を物語の下敷きを持つ英語短篇小説「団欒図、1945年」(“Conversation Piece, 1945,” 1945) との主題的な連続性も視野に入れつつ、『ロリータ』の代表作が試みたポーとの間テクスト的な対話の歴史化を目指す。

「アナベル・リー」(“Annabel Lee,” 1849) をはじめとする数々のポー作品への言及が織り込まれた『ロリータ』の物語は、随所で「ゲロンション」(“Gerontion,” 1920) をはじめとするモダニズム詩人T・S・エリオット (T. S. Eliot) の作品にも言及している。その悪名高きはユダヤ主義を理由にエリオットを毛嫌いしていた作者は、にもかかわらず本作の執筆中にエリオットを読み通すなかで、評論「ポーからヴァレリーへ」(“From Poe to Valery,” 1949) を物したこの詩人批評家とポーとの結び付きを利用しながら、その死後にシャルル・ボードレー (Charles Baudelaire) からフランス象徴主義詩人によって高く評価されたポーのフランスからアメリカへの帰還を自作に書き込もうとしたのではないか。加えて、まさしくポーが象徴主義の象徴として神格化されるまでに至った、19世紀末から20世紀初頭にかけてのロシア文学史上のいわゆる「銀の時代」を自らの文学的ルーツと見なしていたナボコフは、ポーの作品に語りかけつつ、それが引き連れるロシア文学史に対しても呼び掛けるという、いわば二重の対話を繰り返していたのである。1958年にコーネル大学で行われた「ロシアの作家、検閲官、読者」(“Russian Writers, Censors, Readers”) と題する講演において、ソヴィエトを批判すべく読者の自由を力強く主張したナボコフにとって、革命前のロシア文学のみならずポーを含めた欧米文学を読む自由が保障されていること——いわば読むことのデモクラシーこそ、彼が受け継いだ最大の思想的遺産だったのだ。

## 第二章 明白なる薄命——『プニン』・赤狩り・キノコ雲

アメリカ時代を大学教師として過ごしたナボコフが『ロリータ』に次いで発表した『プニン』(Pnin, 1957) の物語は、コーネル時代の同僚であるロシア語教師サミュエル・ハザード・クロス (Samuel Hazzard Cross) とゴードン・フェアバンクス (Gordon Fairbanks) とナボコフとの確執を透かし見せる。キングズリー・エイミス (Kingsley Amis) の『ラッキー・ジム』(Lucky Jim, 1952) に始まる戦後イギリス小説の伝統を担うデイヴィッド・ロッジ (David Lodge) も言うように、地方大学の小さな世界を舞台に繰り返される不運なプニンの物語は、奇しくもエイミスの小説と同年に発表されたメアリー・マッカーシー (Mary McCarthy) の『鬱蒼たる学府』(The Groves of Academe, 1952) と同じ時代を呼吸していた。ここで重要なのは、『プニン』のうちにはもう一人のマッカーシー、すなわちジョセフ・マッカーシー (Joseph McCarthy) が主導した赤狩りにまつわるナボコフの関心が認められると同時に、作中でも言及されるチャールズ・チャップリン (Charles Chaplin) に対する否定的な態度など、ナボコフが妻ヴェラ (Véra) と共有していた反共イデオロギーについての理解を深めるための重要な手掛かりを発見することができるということだ。こうした赤狩りの時代に対するナボコフの応答を主題化する第二章ではさらに、先行研究が明らかとした『ロリータ』をめぐる核批評の可能性を踏まえて、『プニン』の語り真偽をめぐる問題についての考察を作中の「灰」

の主題の考察、ひいてはホロコースト表象ならびに核表象の分析に敷衍することを目指しながら、新天地アメリカでの成功を切に願う亡命ロシア人大学教師のアカデミックな薄命をコミカルなタッチで描いた大学小説たる本作を、冷戦状況をめぐるシリアスなドキュメンタリーとして読みなおす。

### 第三章 不完全な真空——『淡い焰』における封じ込めのレトリック

ナボコフが文学講義のなかで思い浮かべる「良き読者」、つまり小説の細部と再読を重視する彼にとっての理想的な読者は、「文学的チェス・プロブレム」たるその創作にとっての模範的な解答者を意味する。言い換えれば、ナボコフによって精巧に作り込まれた「美しいパズル」を手取る読者には、物語を幾度となく読み返すなかでその細部を大切に拾い集め、作中に仕掛けられた数々の謎を解き明かした先に待ち受けるであろう「優雅な解答」を発見することが常に求められている。そうした新批評的な精読を賛美する作家の文学観は、自己のみを包摂して外的かつ作者にとって不都合な要因を排除する、いわば解釈の閉回路を思い描いていたと言えるだろう。1980年代に『ロリータ』の作者の文学芸術の倫理的側面に新たな光を当てた哲学者リチャード・ローティ (Richard Rorty) が、1990年代初頭に提起したナボコフの再読をめぐる読者論的問題、そしてノーベル賞作家J・M・クッツェー (J. M. Coetzee) が「ナボコフの『淡い焰』と芸術の優位」 (“Nabokov's *Pale Fire* and the Primacy of Art,” 1974) および1990年代に行われたインタビューにおいて打ち出したナボコフ批判にも目を向ける第三章の目的は、先駆的ポストモダン小説との定評を持つ『淡い焰』 (*Pale Fire*, 1962) を冷戦小説として再評価する作業を通じて、いわばナボコフの文学的想像力を同時代の歴史的現実に「短絡」させる契機を探ることにある。

スティーヴン・ベレット (Steven Belletto) が「寒い国から帰ってきたゼンブラ人、あるいはナボコフの『淡い焰』、偶然、冷戦」 (“The Zemblan Who Came in from the Cold, or Nabokov's *Pale Fire*, Chance, and the Cold War,” 2006) において実践した本作の核批評を念頭に置いたとき、『淡い焰』が描く「琥珀」のイメージのうちにもまた、登場人物が抱く核の不安を読み取ることができるだろう。紺碧の空が比喩的な意味で赤く、もしくはピンク色に染まり、そこからソ連製の爆弾によって死の灰が降り注ぐ。そうした共産主義の核の脅威がもたらしうる「封じ込め」の失敗をめぐる国家的なパラノイアを『淡い焰』の主要頂上人物たちに共有させたナボコフもまた、その耽美的なセルフイメージとは裏腹に、フランク・カーモード (Frank Kermode) の終末論 (*The Sense of an Ending*, 1966) を踏まえたトニー・ジャクソン (Tony Jackson) が言うところの「核の時代の終わりの感覚」を研ぎ澄ましていたのではないか。そのような視座に立つことで初めて、スプートニク・ショックの年に本格的な構想が開始された『淡い焰』が、奇しくもキューバ危機の年に読者に届けられたことの意味が理解される。そしてまた、『ベンド・シニスター』 (*Bend Sinister*, 1947) や『確証』第16章の草稿、そしてスタンリー・キューブリック (Stanley Kubrick) のために書かれた『ロリータ』の映画脚本に見られるウォルト・ホイットマン (Walt Whitman) への言及の可能性を念頭に置いたとき、暗殺者の凶弾に斃れた作者の父の記憶を喚起する細部を含んだ『淡い焰』の物語のうちに、大統領の暗殺をめぐる韻を踏むアメリカ史との共振関係を見出すことができるだろう。

### 第四章 遠くの戦争——核の時代の『ワルツの発明』

その前半生において折に触れてロシア語戯曲を執筆したナボコフは、アメリカを訪れるのとほぼ同時に英語作家への転身を果たして以降、概して劇作から遠ざかっていった。だとすれば、なぜ『ワルツの発明』 (*Izobretenie Val'sa*, 1938) だけが作者の生前、1966年に英語版 (*The Waltz Invention*) に生まれ変わったのか。それは1960年代の読者にとっては原子爆弾を容易に想起させたであろう「遠爆」なる謎の兵器をめぐる本作が、いわばキューブリックの『博士の異常な愛情』 (*Dr. Strangelove or: How I Learned to Stop Worrying and Love the Bomb*, 1964) を彷彿とさせるブラック・コメディとして受け取られる可能性に対して、ナボコフ自身が極めて意識的だったからだ。『ベンド・シニスター』の再版に向けて1963年に書き下ろされた序文にも窺えるように、新批評的な感性を光らせたナボコフの筆は、表面上は同時代の政治社会情勢に対して無関心を装っているかに見える。だがその実、1950年代から晩年にかけての作品に「アトムスク (Atomsk)」なる言葉遊びが散見されることからして、彼が米ソ核開発競争を横目に創作活動を行っていたという事実は疑いえない。1930年代においてはのちの『ベンド・シニスター』と同じく独裁者への抵抗の身振りを意図した作品であったはずの『ワルツの発明』は、1960年代においてはバートランド・ラッセル (Bertrand Russell) の活動に象徴される平和運動への批判を含意することになった。こうした自作翻訳をめぐるコンテキストの変化に注目する本章では、英語版『ワルツの発明』の序文に見られる作者の言葉を1960年代から70年代にかけてのインタビューの発言に結び付けつつ、ヴェトナム戦争への賛成の立場を崩すことがなかったナボコフの姿にも目を向ける。

## 第五章 言葉の闘技場にて——『アーダ』あるいは翻訳のポリティクス

ナボコフの『透明な対象』(Transparent Things, 1972)の語り手(たち)曰く、「あらゆる夢は日毎の現実のアングラムにすぎない」。だとすれば夢にまつわる作家の関心が反映された晩年の大作『アーダ、あるいは愛欲——ある家族の年代記』(Ada, or Ardor: A Family Chronicle, 1969)の物語もまた、作者が生きた冷戦期アメリカの現実が虚構に変換されたものだと言える。夢に現れた言語の捩れを拾い集めるがごとく、原文を歪曲した他者の誤訳を糾弾する主人公兼語り手ヴァン・ヴィーンの語りの裏には、彼独自の概念である「直訳」こそが真の翻訳であると言って憚らなかった作者自身の強硬な意見が見え隠れする。というのも小説冒頭にレフ・トルストイ(Leo Tolstoy)の『アンナ・カレニナ』(Anna Karenina, 1857)の誤訳者として登場する「R・G・ストーンロウワー(R. G. Stonelower)」なる端役のうちに、ナボコフは『オネーギン』論争において敵対する立場にあった批評家ジョージ・スタイナー(George Steiner)と詩人翻訳家ロバート・ローウェル(Robert Lowell)に対する揶揄を込めていたからだ。

『不眠症者の夢——ウラジーミル・ナボコフが試みた時間の実験』(Insomniac Dreams: Experiments with Time by Vladimir Nabokov, 2018)に収められた夢日記や、他の小説作品・文学講義にも考察の範囲を広げる本章では、スタイナーに対するナボコフの反目に関する考察を議論の補助線に取りながら、彼の翻訳観が反マルクスのなコンポジションを持ちえた可能性を論じる。『アンナ・カレニナ』のみならずギュスターヴ・フロベール(Gustave Flaubert)の『ボヴァリー夫人』(Madame Bovary, 1857)のパロディを大々的に繰り広げる『アーダ』の物語の背後に、評伝『ニコライ・ゴーゴリ』(Nikolai Gogol, 1944)で繰り広げられたこの作家独特の俗物批判を透かし見ること。資本家階級批判を繰り広げるカール・マルクス(Karl Marx)に内在する、フロベールの意味合いでの俗物性を指摘するナボコフが、文学講義において他ならぬマルクスの娘であったエレノア・マルクス・エイヴリング(Eleanor Marx Aveling)が手掛けた『ボヴァリー夫人』の英語翻訳を批判するとき、この作家にとって翻訳とは文学的創造の可能性を持つ審美的な空間である以上に、憎きソヴィエトの底流を走るマルクスとその思想的遺産と対決するための、極めて政治的な闘技場でもありえたのだ。

## 終章 諜報の痕跡——スパイ小説としての『見てごらん道化師を！』

主人公兼語り手の自伝物語を読み進めながら、絶えず眼前にちらつく作者の実人生と著作の影を追い求めること。ナボコフが生前最後に発表した長篇小説である『見てごらん道化師を！』(Look at the Harlequins! 1974)は、そうした二重の読みを読者に求める奇怪な作品と見なされ、多くの場合セルフパロディの過剰ばかりが目立つ老境に達した作者の自己耽溺との謗りを受けてきた。だが1960年代後半に交わされたナボコフとアルフレッド・ヒッチコック(Alfred Hitchcock)とのスパイ映画の構想にまつわる意見交換を念頭に置くならば、作中人物の諜報活動やレニングラードへの潜入を描き、あたかも重要な情報を隠蔽するような欠落が含まれた本作の物語を、そうした従来の酷評とはまた別の仕方を読みなおすことが可能となる。その作業はとりもなおさず、初の英語長篇小説『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』(The Real Life of Sebastian Knight, 1941)をはじめとするそれ以前のナボコフの著作に見られるスパイ小説の意匠を拾い集めながら、作者の想像力が冷戦期に絶大な人気を誇った大衆ジャンルに再接近する地点を見定めることを意味する。

本章の、そして本論文の結論として取り上げるナボコフとチェーホフ出版との関係性もまた、先に序章で示した作家研究から文化冷戦研究への橋渡しをするための重要な材料となる。1950年代前半にニューヨークで活動を行ったこのロシア語出版社は、ナボコフのロシア語小説『賜物』(Da [The Gift], 1953)の版元でもあり、発禁処分を受けたソ連作家の作品や英米文学のロシア語翻訳の出版を手掛けていたが、その財源はCIAから資金援助を受けていたフォード財団にあった。冷戦を戦うための文化兵器の武器庫とも称されるチェーホフ社の実情を、実際にナボコフが熟知していたのかどうか——彼自身が口を閉ざした文化冷戦への関与の可能性を問うことは、『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』で用いられた表現を踏まえて言えば、月の裏側を想像することに似ているのかもしれない。スパイ小説としての『見てごらん道化師を！』を読み解くように、むしろその欠如が持つ意味を想像することによって、作者の入念な自己検閲によって抑圧されたテキストの政治性が浮かび上がってくる。

同時代の歴史的背景に目を凝らしながら、既知のテキストの細部に潜む未知の解釈の可能性に遭遇すること。あるいは、英語作家としてのナボコフの想像力が冷戦期アメリカの政治的な重力に絡みつかれ、そのフィクションが書き手の意図とは裏腹に同時代の現実を映し出してしまふ、その瞬間を切り取ってみること。そのときアルプスの高みから下界を見つめる浮世離れした言葉の魔術師は、CIAが暗躍し、リベラル・デモクラシーの危機が叫ばれる核の時代を生きた歴史の証人として、読者の前にふたたび姿を現す。そのシルエットと同じ輪郭を持つ空白は、冷戦文化史というはるかに巨大な、そしておそらくは完成することのないジグソーパズルのなかに見つかるはずだ。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

| 氏 名 ( 後 藤 篤 ) |                     |
|---------------|---------------------|
|               | (職) 氏 名             |
| 論文審査担当者       | 主 査 教 授 渡 邊 克 昭     |
|               | 副 査 准 教 授 岡 本 太 助   |
|               | 副 査 教 授 畑 田 美 緒     |
|               | 副 査 教 授 中 村 未 樹     |
|               | 副 査 准 教 授 高 橋 健 一 郎 |

## 論文審査の結果の要旨

ロシア出身の亡命アメリカ作家ウラジーミル・ナボコフは、専ら自作は芸術のための芸術を志向する審美主義的観点から鑑賞されるべきであり、そこに政治性を読み込もうとすることは誤謬であるという新批評的姿勢を貫いてきたが、本論文「蜜月の裏側——ウラジーミル・ナボコフと冷戦期アメリカ」は、そうした自己神話化の演出に基づく小説美学に強く影響されてきた従前のナボコフ批評のパラダイム転換を図るべく、渡米後に英語で発表された彼の小説5作と戯曲1作を冷戦期アメリカの現実に照らし合わせて再文脈化し、そこに秘められた歴史認識と政治意識を炙り出そうとする野心的な論考である。伝記的事実を踏まえ、膨大なナボコフ批評の先行研究を自家薬籠中のものとして読みこなし、テクストの細部を同時代の歴史的な文脈と緻密に照らし合わせて新たな読みを提示することにより、冷戦戦士としての亡命作家ナボコフの隠されたプロフィールが鮮やかに浮き彫りにされている。そのようなプロフィールを描出するにあたって前景化されるのは、切迫する共産主義の脅威に対する危機意識と表裏一体をなして、テクストの随所に影を落としている核の不安である。執筆者の該博な知識に裏打ちされた本論文の最大の魅力は、一見冷戦とは無関係に見えるテクストの細部に多角的な視座より光を当て、そこから作者が必ずしも自覚しなかった政治的意識を緻密に抽出していくところにある。英語作家としてのナボコフの想像力が冷戦期アメリカの政治的磁場に誘引され、書き手の意図とは裏腹に同時代の現実を映し出してしまう瞬間を鮮やかに切り取るうとした本論文は、ナボコフ批評の見取り図を刷新するという意味において、大いなる学術的価値を有している。

序章「既知との遭遇——ナボコフの冷戦コンテキスト」は、当時CIAの影響下にあった批評誌『エンカウンター』に掲載されたナボコフのエッセイ「『ロリータ』と題する書物について」が、反共リベラリズムのイデオロギーに包摂されることで、冷戦戦士のマニフェストとしての意味を獲得したことを鮮やかに論証している。同誌に掲載された彼の英語短篇小説「ヴェイン姉妹」は、先行研究においてメタフィクショナルな幽霊小説として専ら受容されてきたが、序章は本論に先立ってこのテクストに潜む核をめぐる不安を炙り出し、ナボコフ文学を冷戦期アメリカの論脈へと巧みに接続することに成功している。

第一章「読むことのデモクラシー——『ロリータ』のリベラルな想像力」においては、批評家ライオネル・トリリングとナボコフの親交をめぐる伝記的事実や、モダニズム詩人T・S・エリオットに対するナボコフの言及を手掛かりに、ロシア文学史上の「銀の時代」を自らの文学的ルーツと見なしていた彼が、『ロリータ』においてエドガー・アラン・ポーに語りかけつつ、ロシア文学史に対しても呼び掛けていたかを明らかにすることにより、間テクスト的な二重の対話を歴史的な文脈に即して考察している。そのとき前景化されるのが、共産主義を批判すべくリベラルな想像力を重ねるナボコフにとっての「読むことのデモクラシー」であるという結論は意外性があり、説得力に富む。

第二章「明白なる薄命——『プニン』・赤狩り・キノコ雲」は、アメリカ時代を大学教師として過ごしたナボコフが『ロリータ』に次いで発表した学園小説『プニン』を取り上げ、同僚のロシア語教師たちとの確執や同時代のメアリー・マッカーシーの『鬱蒼たる学府』にも言及しつつ、もう一人のマッカーシー、ジョセフ・マッカーシーによる赤狩りに対するナボコフの関心を浮き彫りにしている。亡命ロシア人大学教師をコミカルなタッチで描いた『プニン』における「灰」のテーマ、ホロコースト表象、及び核表象を分析することによって、本作が冷戦をめぐるシリアスな

ドキュメンタリーとして読み直し可能であることが精緻に論じられている。

第三章「不完全な真空——『淡い焰』における封じ込めのレトリック」は、作家が仕掛けたいわば「文学的チェス・プロブレム」をすべて優雅に解き明かす読者を理想とするナボコフ自身の耽美的な姿勢が、かえってテキスト解釈の幅を狭めるとの立場から、本章はポストモダン小説の極北ともいべき『淡い焰』を冷戦小説として読み直し、彼の文学的想像力を冷戦期の歴史的文脈において再定位しようとする卓越した論考である。この小説に描かれた「琥珀」のイメージのうちに登場人物が抱く核の不安を読み取り、「封じ込め」の失敗をめぐる国家的パラノイアをテキストに描き込んでしまったナボコフもまた、核の時代の終焉の感覚を研ぎ澄ましていたという結論は先行研究を圧倒するインパクトがあり、本論文の根幹をなす洞察として高く評価することができる。

第四章「遠くの戦争——核の時代の『ワルツの発明』」は、1966年に英語版に自作翻訳された1938年のロシア語戯曲『ワルツの発明』に着目し、表面上は冷戦期の政治に対して無関心を装っていたかに見えるナボコフが、実際は米ソ核開発競争を敏感に意識しつつ、創作活動を行っていたことを、独創的なテキスト分析を通して明らかにしている。原爆を想起させる「遠爆」なる兵器が登場するこの作品が、キューブリックの『博士の異常な愛情』を彷彿とさせるブラック・コメディとして受け取られる可能性に対してナボコフが意識的であったという考察は、1950年代から晩年の彼の作品の中に「アトムスク (Atomsk)」という言葉遊びが見られるとの指摘とも相まって、ヴェトナム戦争を容認する立場を崩さなかったナボコフの政治姿勢を巧みに前景化している。

第五章「言葉の闘技場にて——『アーダ』あるいは翻訳のポリティクス」においては、夢に対するナボコフの関心が表出する晩年の大作『アーダ』を取り上げ、夢に現れた言語の振れを拾い集めるがごとく、原文を歪曲した他者の誤訳を糾弾する主人公の語りの裏には、当時、反目関係にあった批評家ジョージ・スタイナーと詩人翻訳家ロバート・ローウェルに対する揶揄のみならず、『ボヴァリー夫人』の英語翻訳を手掛けたマルクスの娘、エレノア・マルクス・エイヴリングに対する嫌悪感が反映されていることが論証されている。「直訳」こそが真の翻訳であると言って憚らないナボコフの翻訳観と、マルクスに対する彼の俗物批判が、反マルクス的なコノテーションをともなって共振し、翻訳がナボコフにとっては政治的な闘技場と化していたという主張は、彼の翻訳論に貴重な一石を投じる卓見として評価に値する。

終章「諜報の痕跡——スパイ小説としての『見てごらん道化師を！』」では、ナボコフが生前最後に発表した長篇諜報小説を俎上に載せ、初の英語長篇小説『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』以来、彼が蓄積してきたスパイ小説の意匠を再動員しつつ、冷戦期に絶大な人気を誇った大衆ジャンルにナボコフが再接近する地点をこの最終作に探り当てようとした労作である。CIAから資金援助されたフォード財団を財源とし、発禁処分を受けたソ連作家の作品出版を手掛けてきたチェーホフ出版は、冷戦を戦うための文化兵器の武器庫とも称されてきたが、この出版社とナボコフの親密な関係を念頭に置きつつ、彼の入念な自己検閲によって抑圧されたテキストの欠如が持つ意味を考察することによって、ナボコフ文学の政治性が浮かび上がってくるという洞察が導き出されている。こうした終章の論述は、論文全体を統括する明察として得難い説得力をもっており、本論文が、今後日本のナボコフ研究の必読書となることを窺わせる。

審査委員からは、各章の議論が念入りに構築されていることを評価した上で、時として論述が細部にわたり、情報を詰め込み過ぎた結果、読者にやや負担を強いている部分も散見されるという指摘があった。続いて、ナボコフが演劇というジャンルとどのように向き合ったのか、冷戦文化史の実相にもっと具体的に踏み込んで議論を進めてもよかつたのではないかという点をめぐって質疑が行われた。また、ロシア語の音声表記についても詳細な提言がなされた。

しかしながら本論文は、難解なテキストと先行研究を綿密に読みこなし、ナボコフ批評において大きな影響力をもってきた新ニュー・クリティシズム批評的アプローチを核ニュークリア・クリティシズム批評へと大胆に転換させた点で高く評価できる。本論文からは、執筆者が、アメリカ文学・文化に関して広い視野と問題意識を有していることが窺え、アメリカ研究への寄与も顕著である。

上記考査に基づき、総合的に判定した結果、本審査委員会は全会一致で、本論文が博士（言語文化学）の学位を授与するのにふさわしい論文であるとの結論に達した。